

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 思想家としての厳しさと激しさをまったく感じさせない穏やかな口調で持論を展開する吉本隆明氏。瞳は少年のようにキラキラと輝き、とても純粋な印象を受ける。

2 旧米沢高等工業学校本館の展示室の一角に設けられた吉本隆明氏の足跡を辿る展示コーナー。吉本氏の写真、経歴、詩集などが並び(震災の影響により現在閉館中)。

3 吉本氏の処女詩集「草莽」(そうもう)。詩人としての原点とも言えるこの作品は米沢時代に書かれたもの。同級生の郷右厚氏より提供いただいた貴重な一冊。

吉本隆明氏を偲んで

「戦後思想界の巨人」と呼ばれた本学OB吉本隆明氏。
面識のある二人が語る、米沢時代と近年の吉本氏。

思考の成果

吉本隆明 思想家、詩人、評論家 (横山孝男 大学院理工学研究科教授 × 山崎洋一郎 社団法人米沢工業会常務理事)

—長年、日本の言論界をリードしてきた思想家、詩人、評論家として知られる吉本隆明氏が今年3月16日に亡くなった。戦後日本の思想・文学・文化に多大な影響を与えたその人物が、本学工学部の前身である「米沢高等工業学校」の卒業生であることを知る人は意外に少ないのでは？

山崎 残念なことにそのようですね。吉本さんはここをご卒業された後、東京工業大学に進学しているので、最終学歴で紹介されると山形大学の名前は出てきませんからね。

横山 それでも、折に触れ、新聞などでも米沢時代の話は紹介してくれていたんですよ。東京生まれでずっと都会育ちの吉本さんが初めて米沢に降り立った時、あまりにも

暗く寂れた街の様子に、そのまま帰ろうと思ったとかね。

—そもそも東京育ちの吉本さんが米沢高等工業学校に進学した理由は？

山崎 進学先に米沢を選んだ理由については、「ゴチャゴチャした感じの東京下町に生まれたせいか、自然に対する憧れがあった」と言っておられましたね。そして、米沢で日々を送るうちに、米沢の大自然に吉本さんは多くの驚きや感動を受け、更なる探求心、観察眼を磨き、表現力を豊かにしていったようです。

横山 吉本さんが心酔し、大いに影響を受けた宮沢賢治との出会いもここ米沢。寮生の一人から宮沢賢治の作品を紹介されたの

がきっかけで、賢治作品に没頭し、生誕の地花巻を訪れたりもしていたようです。

—宮沢賢治や詩作に没頭しながらも学校の成績も非常に優秀だったと聞きますが。

山崎 旧米沢高等工業学校本館の展示室に成績表が掲示してありますが、3年間通して5番以内と、大変優秀だったようです。人には「もっと遊んだ方がいい」と言い、自身も勉強はしなかったようなことを言っていますが、もともと優秀な人だったということですかね。

横山 東京の人は、頑張っている姿を人に見せたくないところがありますから、口で言うほど勉強していなかったわけではないかもしれませんがね。

今回のランナー:



吉本隆明

よしもとたかあき ● 東京都出身。1942年米沢高等工業学校応用化学科入学。卒業後、東京工業大学に進学。思想家、詩人、文芸評論家。次女は作家のよしもとばなな。本年3月16日他界。

ランナーを語る人:



横山孝男

よこやまたかお ● 大学院理工学研究科教授。1948年山形県生まれ。山形大学工学部卒業、東京工業大学で博士号取得。専門分野は熱力学。工学部百年史誌部会長として史誌の編集に尽力。



山崎洋一郎

やまざきよういちろう ● 社団法人米沢工業会(山形大学工学部同窓会)常務理事。ブログ「米沢より愛を込めて」を運営し、工学部および米沢に関する情報・話題をつぶさに紹介している。



4



5



6

4 吉本氏による直筆の文章。米沢について綴った原稿のようだ。その大胆かつ緻密に加筆された文面には、物事に対する真摯な思いやこだわりが溢れている。

5 2009年に横山さん、山崎さんが吉本氏のご自宅を訪れた際のワンシーン。米沢時代の思い出話にも花が咲き、質問に対しても率直に凜とした言葉で答えてくれた。

6 吉本氏の米沢時代のエピソードや、3年前に吉本氏をご自宅に訪ねた際の思い出話などを語り合う横山さんと山崎さん。話の端々に偉大なOBへの尊敬の念が滲む。

—吉本さん宅を訪ねられたそうですね。

横山 はい。2009年に工学部100周年の記念誌への寄稿をお願いするためにご自宅を訪問させていただきました。私がお会いしたのは後にも先にもその一回だけですが、山崎さんは何回か会われているんですね。

山崎 はい。横山先生とご一緒した時を含めると4回お目にかかっています。吉本さんのご自宅は寺院の隣にあり、猫が戯れていて風情ある佇まいでしたね。

横山 通された部屋で待っていると、吉本さんは床を這って私たちの前に現れました。あの頃からすでに体調はあまりよろしくなかったようです。それでも話し方は凜としていて、大きく澄んだ若々しい目が印象的でした。吉本さんが書いているものを読むと、まさに思想家の激しさを感じるんですが、実際にお会いしてみるととても穏やかで純粋で懐の深い人という感じでしたね。

山崎 確かに、吉本さんの語り口調は穏やかで、また、すべてを受け入れてくれるような優しい眼差しに、思想家という気むづか

しいイメージはまったく当てはまらなかったですね。

横山 せっかくの機会なので「なんのために米沢高等工業学校に入ったのか?米沢高等工業学校と東工大にはどんな違いがあったか」と尋ねると、「入りやすいし、自然豊かなようだし、実業学校を貫き通したかったから」という率直な答えが返ってきました。二校の違いについては「別に何も感じなかった」と器の大きさを感じさせられる答えでしたね。

山崎 大学までずっと「理系」の道を歩んできた吉本さんが、卒業後はどうして活躍の場を「文系」の世界に移してしまったのだろうという疑問を抱いていました。しかし、実際にお会いしてお話を伺っているうちに、おそらく吉本さんはご自身を「文系・理系」などという区分けはしていない、そういったこととらわれない人という答えをいただいたような気がしました。

—卒業後も吉本さんが米沢や大学を訪れる機会があったのでしょうか?

横山 吉本さんが学生運動に深く関わっていたこともあって、本学との交流は希薄だったようです。ただ、友人関係は続いていたようで、同期で本学化学工学科の大沢先生が亡くなられたときには葬儀にいらしていたそうです。

山崎 工学部100周年の時に記念講演をお願いするといった企画もあったのですが、吉本さんの体調のこともあって実現しませんでした。卒業生に吉本隆明氏という偉大な人物がいるということ、本学の財産として何らかのカタチで生かしていきたいとは考えていました。100周年事業もようやく落ち着いたので、本格的に取り組もうとしていた矢先に吉本さんが他界されて、大変残念に思っています。

横山 私は、授業の中で吉本さんの戦争体験などを通して「技術をどう生かすか」といった問題を学生たちに考えさせています。

山崎 吉本さんは本当にたくさんものを残してくれました。それを今後どう生かしていくか、じっくり考えていきたいですね。